

## たちどまる

あれは昨年、日差しがいよいよ盛夏の到来を思わせる、そんな日のことであった。私は仕事で訪れた幼稚園から急ぎ勤務先に帰るべく、足はやにバス停に向っているところだった。私の前には、昼食のための買物か手提を持ち、これまたかなり性急な足取りで進む一人の婦人がおり、さらにその前には、その婦人の連れとおぼしい三歳くらいの女の子が、ばたばたと駆け足で先頭を切っていた。はたから眺めたら、ちょうど昔話にある追い掛けっこの一コマのようだったろうとは、今私自身がその光景を想起して思うことであるが、その光景自体はごくありふれたもので、もし次のような場面が展開しなければ、とうに私の脳裏から消え去っていたに違いない。

さて、二人の先達は私をやや引き離し、あと数メートルで大通り裏のその路地を出るという所で、女の子が急にたちどまったのである。婦人は歩みを緩め、どうしたのといった様子で子どもに近づいた。私は私で職業柄、なぜ子ど



## 芝 恭 子

もが急停止したかを知りたくて、何気ない風をよそおいながら神経は子どもに集中させ、急にゆるゆると進んで行った。子どもは、つと路地の片側に寄るとそこにしゃがみ、（それは私たちの右手であったが）延々と張りめぐらしてあるゴルフ練習場の金網をのぞき込んだ。婦人が子どもの背にかぶさるようにうすくまり、私は二人の二、三步後まで来ていた。と、私はほのかな花の香りをかいだような気がした。

クチナシであった。金網の内側に丈二十センチもないクチナシの一枝が、いかにも唐突な取り合せでさし木されていたのである。子どもはクチナシの小枝に目を凝らし、白い花びらに鼻を向けた。「クチナシよ」とひとこと、婦人は静かに言うと、荒い金網の目に指を差し入れ、クチナシの花を一つ注意深く支えて、そーっと子どもの方に引き寄せた。と言うより、子どもがみずから足を止め心を開き、今や探索にかかろうとしている対象の奥深く、子どもを助

けて送り込むしぐさと私には見えた。婦人はそのまま身じろぎもせず、ただ目と口元から微笑が溢れた。子どもは肩を上げて息を吸い、目前の世界に自分自身のすべてを動員して向い合う様子だった。思考も感覚も魂も。私はこのしじまに息をのんだ。つい数秒前まで婦人の身边を包んでいたリズムと雰囲気は性急であっただけに、ゆったりとして優しいこのしじまを現実かと私は驚き、そして打たれたのである。子どもの声がした。「こんどはママも。さあクナシ」子どもは立ち上っていた。促されて花の香をめぐる母親の横顔を、私はあらためてためらいもなく見た。化粧のない地味な顔立ちだった。そして一方、生き生きと聡明な表情であった。私は計らずも遭遇したこの空間に名残りを惜しみつつ、二人がこちらを向かないうちに歩き出した。

聡明であれ。おとなたちよ聡明であれと、私は自他ともに願う。奔流のような現代に生きる私たちこそ、人がたちどまることの意味を再認識しなければならない。わけても子どもたちがたちどまる意味と、その時おとなの果すべき役割を知るために聡明でありたい。おとなは意志して、たちどまり、おのが姿に、目を向ける。そしてある時は内省しあ

る時は養い、またある時は励むのだ。多くの場合、おとなのたちどまりは内なる行為である。ところが子どもは、ほとんど反射的にたちどまり、自分を引き付けた対象に、全人格を注ぐ。そして思考し試み、また感じる、いわばあからさまで具体的な行為としてたちどまるのである。近年しげく使われる表現をとれば、たちどまることは、乳幼児および児童の世界認識と理解の「構造」に深く関わっていると言えよう。さらに子どもがたちどまる対象は、個々によって一様でない。もしこれを道草やよそみと見なし、ただおとなの計画した内容・速度に従わせることをもって教育活動としているのであれば大変だ。おとなの急務は、子どもの自発的たちどまりを許し助けることと合わせて、カリキュラムの中で何に子どもをたちどまらせるかを、検討し整理することではないかと考えるのである。

昼食時の忙しい買物の途中、実はほんの二、三分を割くことで、たちどまった子どもに心ゆくまで時間を与えた母親の聡明な心情と、あの空間の雰囲気を、私は長く留めておくことだろう。

(東洋英和女学院短期大学)